書評

浅野洋著

『小説の〈顔〉』

藤井　貴志

扱われる作家も時代も実にバラエティに富む本書の「「序」に代えて」の中で著者は、鷗外「追儺」の中の一節――「一体小説はかういふものをかういふ風に書くべきであるといふのは、ひどく囚はれた思想ではあるまいか。僕は僕の夜の思想を以て、小説といふものは何をどんな風に書いても好いものだといふ断案を下す」――を引用し、この文中の「「書く」（傍点部分）を「読む」に読み換えてみたらどうか」と提案するところから始める。その意図するところは「近年「流行」」していると著者のいう「「かういふ風に読むべき」という理論先行型の「読み」」がしばしば陥る概念的裁断の平板さに対し、「鷗外の虎の威を借りて釘を刺」すことにある。文学理論という先験的な鋳型の中へ流し込まれ、個々の顔立ちを変形もしくは喪失してしまうテクストに対し、「作品自体の「読み」」を通じて固有の〈顔〉を浮き彫りにすること――どうやらその困難な営みを指して『小説の〈顔〉』という表題は与えられているようなのだ。

ただし、本書を賢しげな文学理論に対する素朴な反措定として、たとえば理論によって厚化粧を施されたテクストの奥に潜む〈素顔〉の探求として読み解くとすれば忽ち間違うことになるだろう。事実、同じ「「序」に代えて」の中では、ド・マンの『読むことのアレゴリー』の一節に擬えながら「私が読み始める際の指針のひとつ」が語られもするのだし、第Ⅰ部に収録された四編の漱石論のうち、「「吾輩は猫である」試論」ではR・バルト『エッセ・クリティック』が、続く「「坊つちやん」管見」ではM・フーコー『言葉と物』が、さらに「「こゝろ」の書法」では再びバルトの『言語のざわめき』が、何れも論旨にとって抜きにはできない重要度を担い挿入されている。他に目立つところでは太宰論「「魚服記」の空白法」（Ⅳ部）におけるラカンやドゥルーズだろうか。

〈顔〉をめぐる序論における態度表明と、その後に続く文学理論なり現代思想なりの決して少なくない援用との間の整合性に、正直戸惑わざるを得なかったことは事実である。著者が編者の一人に名を連ねる『芥川龍之介を学ぶ人のために』（平成12、世界思想社）収録の論文「今、アクタガワとどう向き合うか」でもやはり〈作者〉の機能をめぐるバルトやフーコーの言説が引用され、と同時に「みずからは一滴の返り血も浴びずに「作者」を扼殺し、「作品」の時代錯誤を嘲笑する一部のテクスト主義者」がそのエピゴーネンとして糾弾されていたから、こうしたアイロニカルなスタンスを著者に余儀なくさせた歴史的な光景や経緯があったのだろう。一見すると錯綜や矛盾とみえる記述の裡に、読まれるべき何かしらの歴史的な軋轢や微細な変化の徴候が孕まれているのかもしれず、本書のコンスタティヴな記述内容とは別に、著者と同時代の無意識がもたらしたともいえるそのようなパフォーマティヴな側面にこそ、私は興味を惹かれた。

本書に収録された論文は昭和五十七年から平成二十五年までに発表された十七編で

あるが、約三十年の歴史的スパンの中で方法論的にも実に多彩なアプローチが実践されている。著者が漱石の猫を評していう「融通無碍」という言葉が相応しいその多様な論文の〈顔〉について、以下素描を試みたい。

まず、「Ⅱ　芥川文学の境界」として纏められた四編の論考である。「手巾」のプレテクストとして久米正雄の短編「母」を同定し、モデルである新渡戸稲造の著作『武士道』の「第十一章　克己」から西山夫人の「微笑」に込められた同時代的意味を探り、さらに桜井鷗村訳『武士道』の「訳序」から「愛児の訃」という共通項を析出してみせる「手巾」私注」は本書の中でも最も実証性の高い章であろう。さらに「ストリントベルクのドラマトゥルギイ」の同時代的典拠についての説得力に富む論証まで含まれているのだから、この論が芥川研究を確実に推し進める一編であったことは間違いない。

続く「「地獄変」の限界」では、「作者」の傀儡に堕し、「既存の意味の体系を破壊」することや「未踏」の領域に踏み込むことが決してない「自足する語り手」が厳しく剔抉される。この章で指摘される「限界」は続く論考「「袈裟と盛遠」の可能性」と対になっており、「作家の計算しつくした結構」や「論理づくのオチ」に回収されることのない「袈裟と盛遠」の不透明な「厄介」さの中に漱石「それから」に連なる「近代」の「愛のアポリア」への対峙が看取され、対照的に「〈芸術至上主義〉という既得の観念を極彩色の語り口で包んだだけ」の「地獄変」の方向において失われた「未発の可能性」がそこに見出されていく。従来の芥川評価軸の転換を試みる姿勢は果敢だが、しかしそのような「可能性」が終に成就しなかったところに問題はあるのではないか、という疑問も残る。それに応えるようにⅡ部の最後には「蜃気楼」の意味」が配置され、「伝達されるべき共通の〈意味〉という接着剤」を喪失して「奇怪な漂流物」と化す「蜃気楼」に「新たな〈ことば〉を望む地平」が仮託されることで、「地獄変」でも「袈裟と盛遠」でもないオルタナティヴな「芥川の〈達成〉」が垣間見られるだろう。

次に「Ⅲ　明治の陰影」に各二編ずつ収録された一葉論と鷗外論に移ろう。まず「「十三夜」の身体」では、原田の「鬼」への変貌や録之助の「破滅」が何れもお関の妊娠という「身体のスティグマ」を契機とすることに着目、妊娠にまつわる女性の「マタニティ・ブルー」をより広く男性をも含む形で捉え直した「プリーグナント・ブルー」という概念のもとに「男たちの動揺や錯乱」が分析される。同時代のジェンダーに纏わる歴史的力学を踏まえた上で、身体論を新しい形で拓く好論といえるだろう。続く「「たけくらべ」の擬態」では、日清戦争のただ中に起稿されながら、それへの明示的な言及のないこのテクストが実は「日清戦争を丸ごと内臓する裏声で歌われた〈戦争小説〉なのではあるまいか」との大胆な仮説のもとに追跡される。書かれていない「裏声」を聞き取るという問題設定に予め潜む困難を予感しながらも、同時代資料を用いつつ黙説法の政治学――子ども達の「小さな〈戦争〉」の背後に現実の「大きな〈戦争〉」の黙劇を読む――を浮上させていく繊細な手付きに次第に説得されていく過程はスリリングであった。

鷗外論である「「百物語」のモティーフ」は、明治二十九年に開催された〈百物語〉

を同年の鷗外の父の死と旧津和野藩当主・亀井茲明の死という二つの出来事の濃密な記憶と不可分とし、二つの死に体現されていた「忠・孝」という「倫理」がもはや「過ぎ去つた世の遺物」となってしまったことを現す謂わば「挽歌」として、明治四十四年に「百物語」が執筆されたことの意味をみる。続く「「キタ・セクスアリス」の〈寂し〉い風景」では、作品冒頭近くに書き込まれた「廃藩置県」の記述と鷗外の伝記的事実との「四年の時差」（虚構の操作）から、鷗外の故郷に対する「引き裂かれたアンビバレントな心情」を浮き彫りにしていく。〈性欲〉にコード化されがちな先行研究の紋切り型をあえてズラし、テクストの〈空白〉の中に「沈黙」するもう一つの歴史を透視する過程は鮮やかである。

研究史を手際よく纏めつつその穴を突き、従来顧みられることのなかった独自の分析視覚へと問題をリフレーミングしてみせる技術は、本書全体を貫く特色といってよい。たとえば既に手垢にまみれたテクストである漱石の「こゝろ」を「変身」というテーマから再読し、その「曖昧さ＝多義性」の最大要因を複数の人物が同一の呼称／自称で呼ばれることの「人称のメタモルフォーシス」に看る「「こゝろ」の書法」（Ⅰ部）、また「Ⅳ　小説と戦略」に収録された「「眠れる美女」管見」では、少女と老人の「淫靡な戯れに目を奪われがち」な先行論に対し、その二者関係の背後に潜む「秘密の宿を管理・監視する宿の女」を「真の主人公」として浮上させ、「四十半ば」の彼女の「性の黄昏」を前景化することでテクストを反転させることに成功している。

同じく第Ⅳ部の最初の論考「「痴人の愛」の戦略」は、日本近代の「傑作」をプレテクストとして様々にパロディ化していく「痴人の愛」に、とりわけ「〈漱石〉的世界を標的とする〈戦略〉」を見出し、譲治とナオミの空間的移動の足跡の中に「〈山の手＝智識階級〉による言説の統御」に対抗するような「ウォーター・フロント」をめぐる物語、即ち「反・山の手の物語」を読む。都市論的視点は本書の掉尾を飾る「「木の都」試論」でも援用され、大阪・上町を舞台に〈私小説〉とは似て非なる〈私〉および「幻影の〈故郷〉」を立ち上げる織田作之助に、ベンヤミン的「遊歩者（フラヌール）のまなざし」が、さらには小林秀雄の「故郷を失つた文学」が重ねられていくだろう。

この章にはやはり小林秀雄の「私小説論」が引用され、「社会化した私」の問題が〈顔〉の主題系と絡めて触れられているのだが、個人的にはむしろ「私小説論」の次の一節――「わが国の私小説の傑作は個人の明瞭な顔立ちを示してゐる」とした上で「マルクシズム文学」が「この顔立ち」を「抹殺した」ことの逆説的効用を説く箇所をこそ取り上げてもらいたかった。ここには著者が「「序」に代えて」で展開した「理論」と〈顔〉をめぐる構造的な二律背反が既に顕著に現れているからだ。

さらにこの問題を本書の中に敷衍するならば、「空白の〈受け取り手〉でしかない人物を主題とする〈書簡体小説〉」という方法によって、「無数の他者」の目に映る「断片的な〈私〉の集合」として「〈虚構の「太宰治」〉」が立ち上がると説く論考「「虚構の春」の〈太宰治〉」（Ⅳ部）も、小林の「私小説論」および〈顔〉の主題系と接続可能な視座を有することが見えてくるに違いない。

極めて上質に完成された各論をそれ自体として閉じてしまうのではなく、解体や節合を通じて横断的かつ多様に開いていくことはむしろ読者の側に投げ掛けられた課題なのかもしれない。たとえば、本書では触れられることのなかった三島由紀夫や花田清輝の〈仮面〉の主題系を『小説の〈顔〉』と交錯させると何が見えてくるのか――そうしたあり得たかもしれない可能性や相乗効果を私は様々に夢想した。

最後に、やはり「「序」に代えて」の中に記されているもう一つの「指針」――「私的な好みでいえば、たとえ論文でも「読者」がなるべく「面白く＝楽しく」読めるような叙述を工夫すること」――は、ほぼ全ての論文で達成されていたことを付言しておきたい。

（二〇一三年十一月、翰林書房、三八三頁、本体三八〇〇円＋税）

（ふじいたかし　愛知大学准教授）